
さくらアナザー ~罪隠す弱者と寄り添う桜花~

風花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

さくらアナザー～罪隠す弱者と寄り添う桜花～

【Zコード】

Z7488U

【作者名】

風花

【あらすじ】

これはもしもの物語　　いや、本当はこの物語こそ彼の正しい人生だったのかもしれない。

祖父が運命を覆す装置など作り上げなければ　　作り上げたのがもう少し遅かったのなら、きっとこうなっていたはず。

魔法少女リリカルなのは ETERNA L及び『リリカルなのは
Strikers』～The last of crime～

ところ物語に至ることのなかつたありえたかも知れない世界。
もうひとつ世界。始まります

(前書き)

今日は、風花です

『蒼空の軌跡』の執筆時間を削り、書き上げていたのがこのお話です
以前から、この話は書こうと思っていたんです
もし、レインがなのはの世界に飛ばされずにさくらと付き合ってい
たらという物語です

今の文の通り、リリカルキャラは一切出できません。どんなに鎌を
突き付けられようが、どんなに砲撃に飲み込まれようと出ないもの
は出ないんです。……ちょっと身体に染みますが（苦笑）

それと、この話は次の長編に出てくるキャラも出でますが気にな
さらないよう

それでは、さくらアナザー、始まります

飛波 レン レイン・アスハと東條 さくらが付き合いだして
一ヶ月が過ぎた

これと言つたきつかけがあつたわけではない。特選クラスになつて
からレインは学園に遅刻して、授業をぼつて、街をぶらついて、身
体を鍛える

そんな毎日の中、中学からクラスが同じだけだつたさくらと知り合
い、友達になり、親しくなり、いつの間にか恋人同士になつていた
彼女の事は付き合つほど好きだつた訳じやない。最初は、きっとす
ぐ終わると思つて頷いた。だけどさくらはそんなレインに満ち溢れ
んばかりの楽しさ、喜び、愛しさを教えてくれたのだ

そのおかげでレインは毎日を楽しく過ごしている

心の内に深い
深い深い闇を残したまま

「………… よし」

時刻は午前六時四十五分

そんな明け方の時間に一軒家の前でよし、と眩いていた少女がいた
栗色の髪をピンク色のリボンでポニー・テールと呼ばれる髪形にして
いる身長百四十cmの少女

彼女の名前は東條 さくら

眼の前の家に住んでいるレインの恋人である

そんな彼女がこんな時間に何のよつがと言つと、

(今日「」レイン君の寝顔を見るのよ。ファイト私!)

恋人の寝顔が見たかつたからだつた

開け放たれた玄関の奥には、家主でありレインの養祖父の平賀 要衛もた…通称奈波の源内が柱に凭れながら静かに寝息を立てている。手にスパナを握っているという事は、恐らくまた作業しながら寝入つてしまつたのだろう

「おじいちゃん……あれほど毛布掛けで横になつて寝てつて何度も言つてゐるのに……もづ」

口では怒つてゐるさくらだが、その表情は薄い微笑みが浮かんでいた近くに置まっていた毛布を源内に優しく掛けたさくらは、起こさないよつこそつと一階に上つていいく。一階にはさくらから見て右に一部屋、左に一部屋あり、その中の一つの襖に手を掛け、ゆっくりと開いた

中はレインが眠つてゐるベッドがあるだけの酷く殺風景な部屋で、シンとさくらの胸を悲しみが過ぎ去つていく

この部屋を見るたびさくらは少し、悲しくなるのださつきのよつな浮わついた気持ちはこの部屋の襖を開けた瞬間に失せていた

静かに眠つてゐるレインに近付く。彼の顔は起きている時には見せない穏やかな表情が刻まれている

幸せな夢を見ているのかな……？

そう考えたさくらは悪いと思いながら、カーテンを開け、レインの身体を揺する

「ま、レイン君。朝だよ、起きて」

やれやれ、やれやれ

ぐりぐり、ぐりぐり

幸せな夢からレインを引つ張りだす

夢はいつかは覚めないと云い

覚めることを忘れた夢は、それがどんなに幸せな夢であつたとしても
いつかは悲しみに変わってしまうから

だからやくらはレインを起こす

悲しみに彩られる前に、幸せを幸せで終わらせる為に

「…………」

軽い呻き声を上げながらレインはその瞼をつづりと開ける。やがて
は半開きの瞳にも映るよつて搔すりながら覗き込む

「おはようレン君。朝だよ」

「…………。寝たりないか、少し寝る……」

布団を頭まで被りながら寝返りを打つレイン

もしかしたら、源内の仕事でも手伝っていたのだろうか

「そんな事言つてなこで起きてしまへ

「…………つてこつか、毎日毎日起してこ来なくていい…………」

「やうはいかなによ。こつもレン君は早起きで寝顔が見られない
し、それに……彼女をんだから」「…………」

「別れよ」

あつさりと別れようと言われた

さくらは思わずレインを揺するのを止めてしまつ

それで眼までだけ布団から出すレイン

眼の前には、少し沈んだ顔をしたさくらが自分を見ていた

「……冗談でもそんな事言わないでほし……凄く悲しくなるよ

……」

さすがに悪いと思ったのか、レインはバシの悪い表情で上体を起こして寝癖の付いた髪を搔く

「……すまない」

「……いいよ。でも、罰としておじこちゃんを起こしてね」

私は朝ごはんを作るから

「分かった」

額ぐのを確認したら、さくらは部屋を出て朝食の支度を始めるため一階に戻るのだった

朝食を食べ終えたレイン、さくら、源内の三人は食器を片付けるとそれぞれ仕事に入った

レインとさくらは学園へ

源内は新たな発明をするために作業を

さくらと付き合い始めてから、レインは遅刻が減った
もちろん毎朝さくらが起こしに来るおかげだ
と、その時、後ろから声をかけられた

「いよ～っす！ 元気があレン！」

「つと……森羅か。眠いが元気だ」

背後からレインの首を腕でロックしたのは、茶髪に茶の眼、眼鏡を
かけた少年

少年の名前は久遠寺 森羅

さくらの友人でレインの二人しかいない親友の一人
金持ちだが、それを鼻にかけることなく自然体で人と接する為、友
好関係はかなり広い

「ほ～ら～、森羅も落ち着きなさ～い」

さらに後ろから声をかけたのは、久遠寺 咲夜。森羅の双子である
どちらが兄なのか姉なのかは決まってないらしい。その事でよくも
めている

ちなみに、毎日制服姿のさくら以外三人は私服で登校している

「落ち着いてるって。
にべつたりだな
さくらもつい一っす。相変わらずレン

「あんたもあんたでレン君にべつたりじゃない森羅。何？ レン君
にあつちの氣があるんじやないでしちうね？」

「くはは、んな身のモノよだつ事誰が考えるか。ただの挨拶だよ挨拶。つーかお前からじこつを取るわけないだろ」「

ロックした腕を離しながら森羅は茶化すように笑い言ひ
言われたさくらの方は若干苦笑しながらも嬉しがり、レインをちら
つと見上げた

「レン君もさくらちゃんと付き合ひだしてからへしゃかりと登校し
てきて、お姉さん嬉しいわ~」

咲夜はのんびりとした口調で言いながらレインの頭をよしよし~と
優しく撫でる。レインは抵抗しない。つていうか咲夜に抵抗なんて
無理だから

「あはは…………っ、レン君、早く行こ。森羅も咲ちゃんも早く
早く!」

「あつと……引っ張るなさくら」

さくらは笑っていたが、何かを感じ一瞬だけ嫌そうな顔をすると、
すぐに戻し、レインを引っ張つて学園へ走つていった
咲夜にだけ気が付く事があつたが、あえて触れずに森羅と共に先へ
行く一人を追いかけていく

その理由とは

「ねえ、あれ、有名な飛波君と久遠寺さん達でしょ。何で何の取り
柄もない東條さんといふのかしら?」

「じゃ、聞くわよ。……知らないの？ 東條さん、あの人達と仲良いのよ」

「やうなのー？ しかも飛波君とあんなに仲良やう……どういふ関係なの？」

「もしかして付き合ひとか？」

「ええー、やだあ……」

そんな言葉が耳に入ってしまったからだ
さくらと咲夜だけだが、それでも聞こえてしまったのだから彼を遠ざけた

きっとレインに聞こえていたなら、迷わず怒つていただろうから

昼放課（昼休みの事）

朝と同じメンバーに加えて、今日は風紀委員長を勤めている黒髪黒瞳の友人、二宮 紅也が近くの机を合わせて昼食を取るうとしていた

「つーか、紅也。お前風紀取り締まるのはいいけど……反抗する奴に対して飛び膝蹴りはないんじゃね？」

森羅は朝、校門で見てしまった出来事を思い出しながら身震いする

さくらに引っ張られたレインを追いかけた森羅と咲夜は、ちょうど校則を守らずにピアスを付けてきて力で押し通るうする一年を紅也が跳び膝蹴りで鎮めた場面にちょうど出くわしてしまったのだから、ちなみに特選クラスのメンバーは簡単な校則さえ守れば私服であるピアスである、何だつてのくである

閑話休題

「仕方ないだろ。風紀を乱す奴は誰であらうと許すわけにはいかないんだ」

「跳び膝蹴りかました時点で充分乱してるけどな」

「問題ない。眼には眼を、歯には歯を、そして一撃には一撃を、だ。それに正当防衛も入ってるから教諭達も納得したぞ」

やれやれと言った風に紅也はパックにストローを差して口に加える

「まあいいんだけど……それよりそろそろ昼飯くれよレン」

森羅はどうでもいい風に返すと、レインに昼飯を要求した

「ああ……ほひ」

そう言つて黒衣の中から取り出すようピアスから四つの弁当箱を取り出すと机に並べた

基本、レイン、さくら、森羅、咲夜の昼食はレインかさくらが作るが、食堂で食べるかの一通り。今日はレインが作った前者の日だと、その時だった

生徒会役員、東條 セイジさん。風紀委員長、一宮 紅也さん
至急、生徒会室までおいでください
繰り返します……

放送部からさくらと紅也の呼び出しがかけられた

「あれ、呼び出しへ何かあつたかな……」「あんレン君。お弁当は持つていくな」

「ああ」

「んじゃ、また後でな」

セイジ ひさくらと紅也は自分の昼食を持って教室を出ていった
残ったレイン、森羅、咲夜の三人

「……毎日毎日悪いな、四つも同じ中身の弁当を作らせて。だけどこれじやあ誰が誰のか分からな……」

森羅はまつたく悪いと思つてない顔でハンカチを広げ、弁当箱を開ける。同様にレインと咲夜も開く

中身は……

レイン&・咲夜

海苔弁、きゅうりの浅漬け、ミニハンバーグ、卵焼き etc.

森羅

一面に海苔弁

「分かりやすつーーー？」

「あ～～彩りが綺麗ね～」

「何で俺だけ海苔弁！？ われやかな悪意を感じるんだけどー。」

さすがにこれには驚き、抗議する森羅
だがレインはまったく取り合わず、食べ始める
だが
また囁きがあった

今度は、レインの耳にもはつきつと

「今のつでレン君の手料理だよね……？」

「しかも久遠寺さん達なら親友つて知ってるけど、何でわくわくさんにも渡してた……」

「久遠寺さん達なら親友つて知ってるけど、何でわくわくさんにも渡
すの？」

「もしかして本当に付き合つてるとかしら……？」

「やつだ、ありえない事言わないでよ～」

きっと聞こえない程度に抑えたつもりだったのだろう
しかし聞こえてしまつた
そう小声で話していた女子に森羅が低い声で叱る

「お～」

「な、何かな森羅君？」

「俺やてめえらは人間なんだから噂話とかするかもしないけどよ、
するならするで場所考えて喋ろや。飯が不味くなんだよ」

低い声で怒られた女子達はそっぽを向きながら謝ると、嫌な顔をして教室から出ていった

それを見届けた森羅はため息を吐きながら弁当に手をつけ、咲夜もいつも通りの笑みで「それじゃあ、いただきま～す」と食事を開始した

レインだけは睨みもせずに黙々と箸と口を動かしている
少し悲壯が混じった瞳をしながら

放課後

何の部活にも入っていないレイン達は最後の授業が終わるとすぐに学校を出していく
校門を出ると……

「お待ちしてました森羅様、咲夜様」

待たれてた

そう声をかけたのは、燕尾服を着た齡にして六十過ぎの男性。後ろには黒い車が停められている

「おひ、長谷部？」

「あら～、どうしたのかしら～？」

森羅達を待っていたのは、長谷部と呼ばれた男性。久遠寺家の執事を勤めている優しいお爺ちゃんだ。しかしその立ち振舞いには一切、歳を感じさせない優雅さを兼ね備えており、奈波のお爺ちゃんランキングでは常に一位を獲得していた

ちなみに源内は三位。一位は源内の弟で学園長をしている光衛

閑話休題

「どうした長谷部？ 今日なんか用事あつたっけ？」

「いえ、実は未由様がお昼頃にお帰りになり、久し振りに真理様の四人で食事などと申されましたので、買い物ついでにこちらに寄つたのでござります」

「あら～、お母さん帰つて來たのね～ 嬉しいわ～」

普段仕事でいない両親の内、一人でも帰つて來たことに喜ぶ咲夜
食事も大賛成の事だらう
森羅も「帰つて來たのかよ……」と愚痴を溢しながらも笑みが浮かんでいた

そんな森羅達に水を差しては悪いと思ったレインは声をかける

「森羅、咲夜。俺達の事はいいから早く帰つてやれよ」

「やつだよ。未由さんきつと喜ぶよ」

二人の好意に森羅達はお礼を言いながら車に乗つて帰つていった
残つたレインとさくらは普段通りにしてくてく歩きだす

基本、やぐらの歩きにレインが会わせている

「あのや、レン君……」

しづら歩いてからやぐらが声をかけた
何だ、と返すレイン

「今から……暇、かな？」

「ああ、大丈夫だ」

「な、ならこれからウチに来ない？ そろそろレン君の事紹介した
いし」

「.....」

黙ってしまったレインにやぐらが見上げ、

「駄目、かな……？」

「.....。いや、構わない」

間が空いたがそれでもレインは頷いた
肯定されるとやぐらは花が咲いたようにぱあッと喜びを表情で表す

「……だが俺はお前の家を知らないぞ」

「大丈夫、私が案内するし きっとお母さんも納得してくれる
よ」

「…………。 もう」

「何?」

「メダパ一いつてゐだる」

「うん」

「…………」

やれやれ

そつ眩きながらレインはくらの手を握つた

そくらの家はどこにでもありそつた一軒家だった

だが、外から見える庭には様々な花が咲き乱れ、道路に面した塀の上や穴にも、植木鉢で飾られている。まるで花に包まれているようだった

「へえ……綺麗な家だな」

レインは見たまま何も考えずに感想を口にする

自分の家を褒められてそくらは顔を綻ばせながら玄関を開けた

「ただいま」

少し大きめの声で帰宅を知らせる

「 もへり、 おかえり~」

戻ってきたのは、落ち着いた感じの女性の声だった
やがて、声の主が部屋から出てきて玄関へ
目測の齢はだいたい二十代真ん中から後半。栗色の髪を蝶々のよう
な形に結わつたりボンでまとめた、女性だった。調理中だったのか
エプロンを着けている

顔立ちからももへりの姉かと判断するレインは軽く頭を下げる

「 おかえりなもへり~」 あら、 お友達? 」

「 飛波 レンです」

「 レン君。 私の彼氏だよ」

「 あら、 そうなの? 初めまして。 もへりの母のつまみです、
みひしきお願いしますね飛波さん」

「 もへりさん..... つて、 母親? 」

思わず呟いてしまった

姉とばかり思っていたからこの不意打ちはなかなかに効果がある

「 はい、 もへりの母親です 」

「 何で知り合この母親のほとんどが永遠の姉ポジショ
ンなんだよ」

思えば、森羅と咲夜の母親、久遠寺 未由も姉と間違つぼび若くて綺麗に見える
正直レインはこの街に何か秘密があるんじゃないか、と本気で考えるようになった

「だ、大丈夫レン君？」

さくらが慌てて駆け寄る

我に返つたレインは「大丈夫だ」と返しておく

「さくら、実はお母さんが帰つてきててね。あなたとお話を
したいそつなの」

「げつ……！ 何でお婆ちゃん帰つてきてるの！？ せつかくいな
いからレン君を紹介しようと思つてたのに……」

「帰つてたら、いけませんでしたかさくら。」

悪態を吐くさくらに部屋の奥から声がかけられさくらは身を固くする
通路にいた声の主は、八十過ぎのような感じだが、長谷部と同じく
歳を感じさせない厳しそうな老婦人だった

レインも老婦人を見た瞬間、寒気を感じ、思わず身構えてしまつ

「お、お婆ちゃん……」

「さくら、お茶を点してきなさい。つぼみは手伝
を」

「…………はい」

有無を言わせない口調でテキパキと指示を『えていく。さくらは嫌そうに返し、つぼみは先程から変わらない笑顔のまま。レインは危機感を感じながらも言う通りに老婦人の後を付いていった

きい、きい

けつこう新しい家であるはずなのに、体重をかけるたびに木床は悲鳴を響かせる。まるで自分を責めているようだとレインは思つてしまつ

お前は招かれざる客だと

きい、きい……

一步を踏み出すたびに神経が磨り減つていく。まるでこの家、この場所におけるルールを破つてはいるようで落ち着くことができないレインは慎重に、丁寧に、足音を殺そうと努める

きい

だが、成功しない

前を歩き自分を先導する和服の老婦人は一切の音を立てず、廊下を進んで行く

この場所の在り方を示すように、ただ無音に
しばらくすると、老婦人の背中越しに水墨画が描かれた襖が見え、
すぐに開かれた。中は畳みと机が夕日を浴び、緋色に染められている
老婦人は無言で歩を進め、机を挟んで奥に座つた

「 お座りなさい」

静かに、厳かな雰囲気で声を発する

レインは部屋に入る前に黒衣を脱ぎ、老婦人の対面に正座で座つた

「お初にお目にかかります。さくらの祖母のはづねと申します

レイン・アスハさん」

「つ……！」

レインは眼を見開き、驚愕する
今呼ばれた名前は、一一つあるもつ一つの名前
飛波レンがあるからレイン・アスハが存在する
レイン・アスハがあるから飛波レンは存在する
だが、その名前は 森羅と咲夜以外のこの街に住む人々にはま
つたく教えた事もないのだ

何故……？

「やはり当たりでしたか。さくらから聴いていませんか？
私ども東條の家系の女は代々巫女の血を継いでいるのです」

「巫女の……血？」

「ええ。最近は薄くなり、ただ飾りだけの神主になりはじめていま
すが、時々私のように色濃く生まれる者がいるのです」

「……先祖返りでもして超能力が使える、など言つんじゃないだろ
うな」

「『』明察。正確には、その人を『見る』事で人生が読めるんです」

「なつ！？」

「もつとも、初代の巫女が持つ十一ある一つだけですが

無茶苦茶だ

そう呟かずにはいられないレイン

もしそうならさくらやつぼみも何らかの能力を持つていてる事になる。
きっと無意識の内だろうが

「…………。で？ その人の過去を『見る』事が出来るあなたが、
俺に何のようだ」

「焦らしてもいけませんので、単刀直入に言わせてもらいます。
さくらと別れなさい」

「…………」

何となく分かつてた
さくらを遠ざけ、一対一で話し合おうとした時から直感していた
付き合いだした頃ならその言葉に頷いていたかもしれない。しかし
今はもう さくらを拠り所として見つけてしまった今は、すぐ
に頷けはしない

「そういう話の役割は、昔から父親が言うのが定石だろう。それに、
いきなり『別れる』とか言われて『はいですか』なんて言える
か」

「虚勢ですね。別にいつもでしたらそれは婿殿にお任せし、私はさ
くらの応援をするつもりでした。しかし あなただけは認めら
れません。あなたみたいな……」

人殺しなんかとは

「つ……」

「十五人いた家族の内、十二人を一人に殺されその一人を殺したあ

なたとさくらが釣り合つはずありません

完全に『視られている』

視透されている

はつねの言つた通り、レインは過去に人を殺していた

家族を殺した家族

兄弟姉妹を殺した兄弟

そいつをレインは 殺した

紛れもない事実を突き付けられる

「……おいババア。人の古傷切開してんじゃねえよ。喧嘩売
つてんのか？」

「あなただって気付いているはずです。自分の存在は さくら
の妨げになっている事を」

「くつ……」

「あの子はいすれ、高みへと昇る事さえ可能な未来がある子です。
ですがあなたが 未来のない停滞したままのあなたがいればそ
れは夢幻と消えるのです……」

「つ……」

言い返せない

眼の前にいる老婦人に何も言い返す事ができない

言い訳も、言い逃れも 何もかも

全てが事実だからだ

意識的にしろ、無意識的にしろ レインは心の片隅で思つてし

まつていたのだ

俺がさくらの道を妨げているのではないか

俺がさくらの友人関係を崩しているのではないか

俺は

俺が……

全ての元凶なのではないか？

「

「あなたは本当に分かっているのですか？ あなたはどれほどの人間と付き合っているのか、を。そして

「

あなたがどれだけ堕ちた人間ということを

まさに心底と呼ぶほどその幾多の言葉は、レインの胸を、心を強く

抉つた

お話は終わりです、といつ言葉と共にレインはさくらが来る前に部屋から出て、家から逃げ出していた

そして、気付いた頃には辺りは真っ暗に染め上げられ、街灯が一つあるベンチに座っていた

これほどまでに心を碎かれたのは、久し振りである。一度目は家族

崩壊

一度目は今

正直、耐えきれない

ただ何も考えず、座つていると、

「あれ？ レン君？」

声をかけられた

静かにそちらに眼を向けるとそこには、さくらが立っていた。手に様々な物が入ったスーパーの袋を持つている事から、買い物の帰宅中と推測できる

さくらは何も応えないレインに首を傾げながら隣にちょこんと座る

「どうしたのレン君？ お婆ちゃんからいきなり帰ったって聞いて心配してたんだよ」

「ああ……」

「もしかして……何か言われたの？」

気になるさくら

もしそうであるなら謝るべきだ

だが

紡がれた言葉は別物だつた

「 もへり」

「 はい、何？」

「 別れよう」

まったく表情を変えずにそのまま告げられた

「 やつぱり別れた方がいい、俺達」

一瞬意味が分からなかつたが、状況を把握すると苦笑した

「冗談でもそんな事は言わないでほしいうて言.....」

「 お前には道がある。だけど俺と一緒になくなるかもしれないんだ」

さくらの言葉を遮り、レインはきつぱつと言つ放つ

「冗談でないと分かると、顔を俯かせる

「 なあ、だから.....」

「 いや.....」

「 う.....」

「 嫌だ」

「セベ……」

「嫌だつ……」

叫ぶよつに拒絕するセベは立ち上がつた

「私がいなかつたらレン君が困るんだよ！ 私がいなかつたら誰が毎朝学園に連れてくの！？ 誰がレンを引っ張るの！？ それに……それこ……」

「大丈夫だ。元々一人でやつていた。お前無しでも俺はやつていける」

「でも……でも……！」

何とか言葉を紡ぐとする

だが、言葉が出てこない

探しても探しても、言葉は紡げない

「お前がいたら俺はお前に頼つきりになつてしまつ。それじ

やあ駄目なんだ」

「……私はレン君が好きなの。一緒にいたいんだよ……」

「セベ！」

「……」

「俺の想いは恋じやなかつたんだよ」

「つー?」

無情にも呴かれる言葉にさくらは息を呑み、絶句した
酷い言葉と分かつている
だけど言つしかないのだ

「俺は勝手な人間なんだよ。勝手に人オ殺して、勝手に逃げて……。
さくら、高みへ行つてくれ。それでいつか俺は凄い奴と付き合つて
いたんだって思わせてくれ」

なあ、さくら

酷い言葉を散々並べて一方的に断ち切る

深夜の静寂を一人の沈黙が包み込む

そして、

「 分かつた」

その言葉にレインは顔を上げた
立ち上がつたさくらは明後日あさつての方を向いている

その瞳に光が灯つてい無い事に、夜中でも分かつた

「約束するよ。こんな こんな女と付き合つてくれて」

ありがとう

最後に囁くように言われた言葉はレインの心に深々と突き刺される
元気でね、と言いながら買い物を持って立ち去るやへりへりレインは
何も言えなかつた

無心のレインはしばらくの間、ずっとベンチに座つていた
そこに声がかけられる

「　　レイン」

辺りには誰一人歩いていない
だがレインは驚きもせずに言葉を返す

「……何だよフリーダム。後、その名を呼ぶな

「生憎とそれはスルーするよ。　　君を基点として半径一km以内には誰も歩いていないよ」

「つ……くつ　　!」

声の主は、耳に付けられた金色のピアスから
その言葉にレインの気持ちは瓦解し、嗚咽を漏らした
嗚咽を漏らしていく初めて分かった

ああ、俺はさくらが本当に好きだつたんだ……
だからこそ余計に嗚咽が漏れる。なのに涙は一滴たりとも流れでこ
ない

それを聞いていたのは、ピアスのフリーダムだけだった

「　　ふーん。お前ら、結婚まで行くのかと思つたが

休日を利用してレインは森羅の部屋に来ていた
何となく、ぽつりぽつりと結果だけを話したら、いつか言われたのだと
咲夜は母・未由と出かけて家にいない

「そんな簡単なものじゃないだろ？」

「いや、選べりつたらあにつけきっとどんな幸福な幸せよつせを
やかな幸せとしてお前を選ぶと思つてたし」

「……どうかな」

そう言つてレインは黒衣を羽織つて立ち上がる
足元には大きめの鞄が置かれていた

「ほんとに行くのか？」

「ああ……悪いな、いきなりで」

レインは数時間の間にあることを決断していた

それは奈波を出ること

何故そう思つたのかは覚えていない。だけど帰^{けんない}してから学園長に
退学を連絡し、祖父にお礼と謝罪を述べ、森羅にだけ自分の過去を
話した

「別に構わねえけど……自分に起きた事からは逃げるなよな」

「……」

答えずレインは立ち去る^うとする

そんなレインの背中に森羅はもう一度声をかけた

今言える眼の前の親友に必要だらう言葉を

「 時間が一番残酷で……優しい。お前なら分かるよな？」

レインから大切な家族を、恋人を奪い、流れていくのは時間だつた
だけど、レインの選択で傷付き、辛い思いをしたさくらやレイン自
身の心をこれから優しく癒していくのも、やはり時間なのだ
真剣に悩み続いているレインに関わってきた森羅だからこそ言える、
彼なりのエール

レインはちらりとだけ森羅を見ると、何も言わずに部屋から出でてい
つた

森羅は何も言わない

ただ今の言葉を理解してくれたと信じて

夜空に星が瞬くように、溶けた心は離れない
例えこの手が離れても、一人がそれを忘れぬかぎり

恋は人を育むためにあるものなのだ

例え、思いが実らなかつたとしてもそれは生きる糧になつてい
くんじゃないか

幸せとはだれかに「えられるものではない
自らの手でつかんでこそ価値があるんだ

あなたのことが好きだから、手放したくないけど……
あなたのこと好きだから、今は、手放さないといけない

「 なあ～んて、世の中そんなに甘々じゃないわよ」

片手で持つている小説を閉じながら、さくらはため息と共に感想を吐き出す

ガタゴトと揺れる椅子は、まるで今の自分の発言を笑っているみたいだつた

あれから三年が過ぎた

彼がいなくなつた事に気付いたのは、学園に来てからだつた
自主退学した。たつたそれだけの言葉で知られ、次には別の報せに入つていた教諭に腹が立つた

放課後、彼の家に寄つたのだが、中には源内が一人で作業を続けてゐるだけ。聞いてみたら、レンは帰つたと言つた。どこに、と訊ねてもさあの、と返されるだけ

自分の気持ちがよく分からなかつた

怒つてゐるのか？

悲しんでいるのか？

それとも 何も感じないのか？

本当に……分からなかつた

それから夏休みが明け、二学期が始まろうとした頃、祖母はつねの指示により学園を退学した。これはレインもそうなのだが、特選クラスの生徒はすでに卒業して居座つてゐる連中ばかりいつ退学しようが関係ないのだ

だけど便宜的に退学としておく

閑話休題

退学したさくらは、はつねから巫女としての修行を強いられた。思
いに関係なく、淡々と

反抗はしなかつた

無論、反論も何も

きつとこれが彼の言つていたものだから

修行は一年半……レインがいなくなつてから一年後に終わり、三年
目までは普通の日常に戻つてきた

……いや、

普通の日常、何て戻つてくるはずがない

さくらひとつて普通の日常とは、レインが隣にいる事だった

そして、今現在

さくらの仕事が始まつた

内容は同業者との連絡役

この時代になつても連絡手段に電話を使わず直接情報を伝えに行く
ところ何とも首を傾げてしまう仕事

（ていうか、そろそろ情報社会に馴染みなさいよね……。変なところで古風なんだから）

ため息を吐きながらそう思つたへり

三年が経ち、多少なりともさくらは成長した

身長は相変わらず低いが、それでも三年前と比べて、十cm以上も
伸びた。これが一番嬉しい出来事

一番目に嬉しい出来事は、大人っぽくなつた事。胸も膨らんできた
し、ウエストもぐびれてきた。ボンキュボンとまではいかないが、
それでも美少女の域には到達しているはずだと自分ではそう思つて

いる

事実そうだし

そして髪形は、ポーテールを下ろしていた。リボンは首の辺りで縛っている

服装は、紅白の和服。巫女服（？）などと呼ばれるそつなアニメとかに出てきそうな服装だった

閑話休題

（こしても……やつと終わりかあ。次はえーつと……）

肩掛けバッグからファイリングされた紙を取り出すとぱらぱら捲つて、次の目的地を調べる紙にはこう書かれていた

白浪はくなみ

ここにいる同業者に連絡事項を伝えれば仕事はおしまい

（綾阪市とか面倒臭い場所を回つたけど……ま、最後の一件なんだし、頑張つていこつ）

自分を応援するように笑顔を作る

だが、それを間違えて受けてしまった者がいた

「ねえねえ、か～のじょ～。かつわいいね～」

十代後半から二十代前半と思われる、見るからに軽薄そうな男
目測で高二くらいか？ 三人組の一人が、こちらが笑い出してしまった。軽薄な口調で、ボックス席に座つてこらへりた
声をかけてきた

三年も経ち、美しさも倍増したさくらは一年前から時々、こうナン
パされている

だけどせぐらは氣付かないフリをして「そう~、ありがとうね」とこやかに答えた

最初に声をかけたカツターシャツの男は、下心見え見えの顔で「いや、ほんと、すぐ可愛いって~」と、同じような表情の残り一人と一緒に近付いてくる

そんな言葉に、営業スマイルで変わらず「ありがと」と答えるかぐら

「いやいや。事実を事実として言つただけだつて。マジド~」

「そんなに言われると照れるわよ」

まったく照れてはいないと思つが、そのリアクションは逆効果だつたかな?と思つ

そのせいだらう

「ねえねえ彼女、いま暇?」

と、喋つた中に派手派手の柄のシャツを着た男の鼻の下が、思いつ切り伸びていた

「悪いわね、こつちは仕事中なの」

「あ~、お仕事中、ね~? だったらさ~、俺らもそのお仕事に付き合わせてくんないかな~。代わりにさ、お仕事終わつたら、俺達が色々~」馳走してやるからとあ

そぐらの横の席に置いている鞄と服装を見てそつにしたカツターシャツ男の態度が、一回り大きくなつた気がした。しかも、耳にたくさんピアスを付けた第三の男も「食い物以外にも、色々なものをあ」と調子づいてくる

ピアスを見ると『彼』を思い出す
よく似たようなピアスを付けている男は時々いたが、『彼』ほど似
合つ奴はいなかつた

「ありがたいけど、そういうわけにはいかないのよ。気持ちだけ受け取つておくわ」

「なあなあ、いいじゃんよお~」

「良いと思つたせっかう」

「俺たれと樂しくしようとせつ」

うわあ、すつごい小物の台詞よね

本当に哀れと思いながらさくらは心中で呟いて、ため息を吐いておぐ

未だに男達はさくらに小物臭い台詞を言つてくるがこの際、スルーだと、そう思い、ちらりと野達の奥を視界に捉えると、ちらに同情してしまつた

「ねえ」

「お、なになに? 何でも聞いてよ」

「『』愁傷さま」

いきなりそんな事を言われて、眼を丸くする二人
一人が何かを言おうとした瞬間、

スパパーン

そんな軽快な音と共に三人の頭が上下に揺さぶられた

「何が何でも！」

なふい！？

卷之二十一

三人は短い叫び声を上げると頭を押さえながら床に蹲る

「少しば大人しくしてくれて心配いらないと思つたらこのザマか。やはりうわべだけの反省だつたんだな」

三人の後ろからため息と共に咳かれる
力チュー・シャで長い前髪を左右に流したヘアスタイル。そして
鋭く金と碧に輝く眼光の女性だつた
この女性が暴走する三人を手に持つている竹刀で殴つたようだ。し
かも三人を知つてゐるような口ぶり

てめ……いきなり何しやがんだ！」

カツター・シャツの男が頭を押さえ、怒気を孕んだ声を上げながら振り向いて 固まつた

「ん？」
私の顔に何かついているか？」

卷之三

その単語が残りの一人に届くと、その一人も痛みも忘れたように振り向いた

「元、だ。だが……見てしまった以上見過^{ハシマ}すわけにはいかないな。お前達を改心できなかつたのは私の責任だ」

「め、滅相もあつませんつ！」

「全部俺らが悪いつス！」

「近堂生徒会長が責任を感じる事はあつませんよ！ いや、マジで！」

何なんだらう。妙に彼女に弱いというか……上下関係が出来ている？ 自分の時とまるで逆と思いながら見ていると、彼女と視線があつた彼らに対する事を聞こうとしているのだらう さくらは一先ず、気にしてないジェスチャーで伝えた

「あ、ああああの、生徒会長？」

「だから元、だ。普通に先輩かさん付けで構わない」

「え、えつと……近堂先輩……。ど、どうしていや、おられるのでしょうか……？」

「出稽古の帰りだ。奈波と言つ街の道場まで行つてきた。あそこの道場主　　塚原　　劉允さんは素晴らしい。今度紹介しようつか？」

「い、いえ！　お断りします！－！」

とことん彼女を怖がつてゐる三人組は、「それではこれで－」と、叫ぶと逃げるよう別車両に消えていった

彼女はまだ何か言いたげだつたが「まあいいか」と興味をなくすとさくらに向き直つた

「恥ずかしい思いをさせてしまったな。彼らに代わり謝らってくれ

「あはは、構わないわよ。……といひで、あなた……」

「ああ、自己紹介がまだだつたな。近堂 麻奈だ」

「麻奈ちゃんね。私は東條 さくらよ、よろしくね」

互いに自己紹介が済んだところで、さくらが「立ち話もなんだし、座つたら?」と、席を勧めた。麻奈は「それでは」と、さくらの対面に腰掛け、荷物を脇に置く

「麻奈ちゃんつて劉允のおっちゃんと知り合つなの?」

「うん、正確には高校の顧問が知り合いで、私は顧問を通して仲良くなせてもらつていて……その口ぶりだとさくらさんも劉允^{せんせい}師匠の知り合いなのか?」

「私は精々、顔見たら挨拶する程度よ。おっちゃんとは私の友達が師弟関係なの」

その友達というのが、レイン、森羅、咲夜なのだ

三人は劉允から剣術を学び、我流で使えるようになつていった。それもなかなかに強い

「やうか。師弟とは羨ましい」

「やつかな？……麻奈ちゃんはどこから来たの」

あつせりと話題を変えるたぐり
麻奈も嫌そつた顔一つせずに答える

「白浪つて小さな街だ。だが私にとつては大事な場所だよ」

「あつ、奇遇ね。私もこれから白浪で仕事なの」

「ほり……その巫女服も仕事で使うのか？」

「うへんどうだひつ……麻奈ちゃんなら知つてるかな、みなかた南方つてい
う神主」

「南方？……その家族なり引つ越したと思つよ。一年くらいう前に

「はい！？」

今から行かなくてはいけない神主と家族が引つ越した事に驚きだす
さくら

引っ越したという事は、当然そこには誰もいない。さくらの仕事は
終わつたも同然だ

「私も詳しく知らないが……何でも神主の息子さんが別地方で起
した事業が成功して、神主やるよりそつちを家族全員で手伝つた方
が暮らしに不自由がない、のが理由だつたと思つ」

「な、何よそれえ……。はあ……最悪」

ため息を悪態と共に吐き出す

やつぱり電話へりこ使えよとシシ「ミたこ

「はは……まあやつため息を吐かない方がいいよ。幸せが逃げてしまつ

まつ

「……安心して。幸せはもう ないから」

「…………？」

「ま、確かにそうね。…………」とか、今晚どうしよう

「夜に何かあるのか？」

「宿よ。ほんとだったら南方の人のとこで一泊して帰るつもりだつたの……」

「…………。お金はないのか？ 一応小さじが民宿もあるんだけど」

「生憎、電車代と少ししかないのよ。参ったわね……」

そう言いながら頬杖を付き、窓の先を眺めるさくら
それを見て麻奈は「ふむ」と考える仕草を取つたと思つと、パチン
と指を鳴らした

「なり私の家に来ないか？」

「えつ？ いいの？」

「ああ、私はぜんぜん構わない。母さんも父さんも快く快諾してくれ

れるだらう。……あいつも、いいだらう

「あいつ？」

話し掛けるようにではなく呟かれた言葉にさくらが首を傾げながら訊ねるが、麻奈は頭を振つて「いや何でもない」と付け足した

「……そう、ならお言葉に甘えて厄介ななるわ。ありがとね麻奈ちゃん」

「いや、じりじり一晩だがよろしく頼む

互いに会釈程度に頭を下げて微笑む
と、同時に、

【次は白浪 はくなみ 白浪……】

ひび割れたアナウンスが一人の耳に届いた

駅のホームに降り立つと、微かに潮の香りが風に乗つて流れてきた
今時珍しい、人が切符を確認する改札口を通り、遠くに海も見えた
駅を出てすぐ眼の前にあるバス停留所。はくなみバスという表記が
剥がれかけている。白浪のほとんどを廻る市営バスが通つているの
だろう

道路の向こうにはさびれた小さなパチンコ屋とが見える
よく潰れないもののね、とさくらは思った

駅前の道を真っ直ぐに進むと、すぐに長い下り坂になっていた
左右には民家に混じって小さな病院やタバコ屋、雑貨屋などが並び、
眼下には街の遠景が見下ろせた

その向こうには太陽の光で輝く海が広がっている

「海と山に囲まれてるなんて珍しいわね……」

「まあね。でもそこが白浪のいとこだ」

下り坂の途中を左折し、歩くこと約十分
『近堂』という表札と『生花専門店』という看板が掛けた一階建
ての木造家屋の前で、麻奈は足を止めた

「着いたぞ、ここが私の家だ」

「へえ……お花屋もやつてるんだ」

「ほとんど母さんの趣味だけどね」

そう言つと開け放たれた玄関に入った

「ただいまー」

普通に声をかける。しばらくすると、Hプロンを身に着けた女性が
現れた

「お帰りなさい麻奈。出稽古はどうだった?」

「実に有意義な時間だつたよ。いつか普通に行きたいな

「じゃあまた休みの日こいつていらっしゃい。 あらっ？ ところで、後ろの方は？」

麻奈の後ろに立っていたさくらを見つけると、首を傾げながら麻奈に訊ねた

麻奈は「実は……」と簡単に経緯を話す、「もちろんいいわよ。何日でも泊まつていってね」と、さくらを心から歓迎した

さくらは笑いながらぺこりと頭を下げるのだった

さくらには馴染みのある古い木と藺草の香り。八畳の居間には心地よい風が流れていた

窓は全面開放されており、網戸の向こうの狭い庭に洗濯物が靡いている様子が見える。庭の隅には麻奈の母親　近堂　雪枝の趣味である家庭菜園が小さな緑の葉を茂らせている

居間に置かれたテレビには野球が映つており、選手達が熱戦を繰り広げていた

雪枝が用意してくれた緑茶に口をつけながら、さくらと麻奈は黙つたままテレビと、その正面に座つていていた男性を眺めていた。短くなつたタバコを口にくわえ、食い入るように試合を見ているのは雪枝の夫　近堂　直志だ。薄紺色の甚平を身に着け、顎の無精髭をぱりぱりと搔いている

何故こんな状況になつていいかと言えば、のんびりしながらせくらを居間へ案内した雪枝に、野球を見ていた直志が「今、いいところなんだ。少し黙つてろ」という一喝を発したからだ

雪枝は「『めんなさいね』」と言いながら台所へ引っ込んでしまい、

麻奈も済まなそうな表情を浮かべながら隣に座つていた

しばらくして「試合終了」いうアナウンサーの声が響く。直志は負けた方を応援していたらしく「ちつ」と舌打ちし、短くなつたタバコを灰皿でもみ消した

そこでよつやくこちらを振り向き、驚いた表情を見せた

「おっ、麻奈じゃねえか。帰つてたのか?」

「帰つてたのか、じゃない。もう十分も前からいたんだぞ」

「いやー、そうだったのか。悪い悪い。試合がずいぶん白熱してたもんでな。そんで……隣にいるお嬢さんはどなただ?」

直志が台所から冷えたイチゴを持つてきた雪枝からイチゴを一つ取りながらさくらに視線を移す

麻奈は頷いてから雪枝にも話したよつて経緯を簡単に説明する。それが終わり、横にずれてちらつと眼をやると、さくらが頷いた

「初めてまして、東條 さくらと申します。麻奈ちゃんの『厚意に甘えさせてもらつてます』

礼儀正しく、正座で自己紹介をするさくら

「で、だ。母さんの許可は取つたから後は父さんだけなんだが……」

「別に構わねえよ、好きなだけ泊まつてけ」

またまた考える素振りさえ見せずに答えてしまつ直志
本当にこの家族は優しいな、とさくらは心から思つた

「それじゃあ今晚の夕飯はたっくさん作りなきやね
しら……あつ、麻奈はあの子に連絡しておいてね」
何がいいか

「ああそうか。今日はあいつも来るんだつたな

『あの子』や『あいつ』と呼んでいる人は誰なのだろう?
聞いてみたい気がするが来るみたいだつたのであえて聞くこともない
さくらはその言葉を胸に仕舞い込み、「手伝います」と囁つた

『もしも』

「やあ、私だ」

『マナか。家から掛けていふとこいつ事は帰つてきたのか。おかげり

「ただいま。今日はウチに食べに来る口だらう?』

『……ああ。そつだつたな。もつ、今日なのか

『……お前がそう抑揚なく囁つと、惰性に生きてゐるみたいだぞ、大

丈夫か?』

『事実だから、な。起きて、仕事に出掛け、食べて、寝て、身体が覚えている事を繰り返すだけ。だが慣れている』

『…………。今日はな、私の友人も共に食べるが構わないか?』

『別に。俺としては近堂家の家計が心配なんだが』

「お前は本当に主夫みたいなだな。ウチはそこまで貧乏じゃないしお前が恩返しとか言って渡してくれるお金のおかげで財政は潤っているよ」

『…………そつか』

「うん、そうだ。じゃあ私は夕飯の支度を手伝つから、もう切るよ」

『ああ。また後で』

「また後で」

さくらりと麻奈が手伝ってくれたおかげで一時間後には、長方形の机にこつぱーの料理が並べられていた

四人でこんなに食べられるのかな、と思つてしまひ。麻奈がその表情で思考を読んだのだろう

「大丈夫。今日は知り合いが来る日なんだ。これぐらいでちょうどいい」

と、言った

その時、玄関から声が響いた

「こんなにちわ～」

「（んばんわ、ですよフリイ」

「邪魔をするぞ」

誰かが入ってきた
きっと知り合いだ。複数とは聞いていなかつたがまあ大丈夫かな、
とさくらは安心しきつて待つていた

「マナちゃん」

最初に飛び出して来たのは、十歳ぐらいの紅髪黒瞳の少女
天真爛漫という言葉がよく似合ひそうだ

「お邪魔致します。一週間振りですねマナ様、直志様、雪枝様。本
日もお招き頂きありがとうございました」

次に入ってきたのは、腰まで届く長い藍髪に冷めたような琥珀色の
眼。青いコートを羽織った寡黙少女
寡黙というより無表情、無感情など『彼』とそつくりだった

「すまないな三人とも。いつも誘つてくれて。ほら、フリイ、つまみ食いをするな」

最後に入つてきたのは、白い長髪にエメラルドグリーンの眼。黒の服に金の幾何学模様が入つた服を着てその上から白い法衣を纏つている男性

二人の保護者だろうか？

「ん？ ラグナ、レーちゃんはどうした？」

まだいるのか、麻奈がラグナと呼んだ青年に訊ねた

「いつも通りだよマナ……」

「こんにちは」

「ほら、来た」

また玄関から声が響き誰かが居間に入つてくる
その姿を見てさくらは眼を疑つた

入つてきたのは、黒髪黒瞳の青年。耳には金色のピアスを付け、黒衣を身に纏つている

さくらは知つていた。彼を

青年もさくらに気付いた瞬間、有りん限りに眼を見開く
二人とも互いしか見てない

そして、

「レン君？」

「 もへりへ。」

相手の名前を口にしたのだった

「 なんで…… もへりへ…… 」 『、マナ……』

レン君 飛波 レン レイン・アスハは一歩後ろに後ずさりしながら麻奈の名前を叫ぶ

「 何でお前がわくらと知り合になんだっ！」

「 デ、モウレーレーちゃん。 もしかしてわくらさんと知り合っただのつか？」

「 いーから答えてくれっつ……」

「 か、帰りの電車でナンパされたから助けたんだ。 それで色々理由があつてウチに……」

「 う…… うう うう……」

皮が破けるくらに拳を握り締めるレイン
まるで全てに後悔しているよう
わくらは静かに立ち上がりレインに近付いていく

「 レン…… 間」

「 もへ、 もへ……」

さくらが一步近付くとレインは一步離れる
怖がるような表情を浮かべて

「レン……」

「来るなっつー……」

「うー」

初めて聞くレインの大絶叫にびっくりと身体を震わせ立ち止まるさくら

「あ……」

小さな子供のように失敗した事に気付いたレインは驚愕とこう顔で
辺りを見回した

呆気に取られている近堂夫妻と麻奈
成り行きを放つて置くかのように食事に手を付け、怒られる紅髪黒
瞳の少女 フリイと怒る藍髪琥珀瞳の少女 ウイン
ただじつと見守る白髪翠瞳の青年 ラグナ
そして 泣えたような顔をしているさくら

「う……あつ……」

何を言えば良いのか

どう取り乱しを消せば良かつたのか
もう、レインの思考は分からなかつた
だから、

「う……」めんなさい……

逃げ出した

セイヘイから背を向け、踵を返し、玄関から飛び出す

「あ……あ、待つてレン君ッ！」

セイヘイも慌てて外に飛び出でりとするが、

「待つのはあなただセイヘイ。闇雲に彼を探しても見つからぬよ」

セウラグナに止められた

セイヘイが振り向くと、ラグナは座りながりセイヘイを見上げている

「……どうして？ あとあんた誰？」

「そなたがあやつの居場所を知らぬから。ちゃんと説明が欲しい者達がいるから。この一つだよ。 ちなみに私はラグナロク。ラグナとでも呼んでくれ」

自己紹介したラグナはそう言つて顎で説明が欲しい者達を差した
差した方には、呆気に取られている麻奈と直志、雪枝がこちらを見
ている

「大丈夫。レインにはもう逃げ出す場所など残っていない。だから
話そう。思いの丈を全部、な

「あ……」

溜まっていた何かが溢れる

涙が頬を伝つた

「……………そうか……………」

全てを語り終えた後、麻奈はゆっくりと息を吐いた
私の話に何を感じたんだろう
何を考えてくれているんだろう
何を……言つてくれるんだろう……

「……………ありがとう」

麻奈はさくらりにお礼を言い、頭を下げた
それから麻奈も自分達の過去を話した
元は家族だつた麻奈も含めた十五人の家族と共に生活し、とても幸
せだつた話を
突然、じぶん麻奈とレイン以外の家族が全員、斬殺された、とても辛かつ
た話を
麻奈の視点で話した

「
レーちゃんは今、本当の意味で生きてないんだと思う。生きるつていうのは、一人じゃないんだ。支えてくれる人がいて、初めて人は立つことができる」

話し終え、虚空を見ながら麻奈は辛そうに、そつ唇く

「そして立つことができるから、未来へ歩く事ができるんだよ」

「…………」

「……ラグナ。君は事件当日もレーちゃんのピアスにいたのだろう？　あの日、起きた事を教えてはくれないか？」

沈黙するさくらをそのままにして麻奈はラグナに頬み込む。あれから十年以上が経つた。

だから……聴かせて欲しい、と

眼を瞑つていたラグナは静かに片眼を開き、ワインを見る。膝で眠るフリイを撫でながらもワインはこくり、と頷く。

「……相分かつた。　　あれは十五年も前だつたな。レインがシスターに頼まれたおつかいを済まして帰る途中、レインが変な感じがすると言つたのだ。慌てて彼が教会に入ると　　あいつが立つていた」

「あいつ？　シスター達全員を殺した犯人がか？」

「ああ。シスター達を殺して、火を部屋に放つていた……シエルがな」

「…………え？」

突然言われた家族の名前に麻奈はぽつりと漏らす

「シエルがアスハ夫妻を、そして兄弟姉妹計十人を斬殺したんだ」

「ま、待て！　遺体にはシエルのも含まれていたはずだ！　お前の

話が本当ならシエルは一体誰に殺されたんだ…?「

「　　レインだよ」

「　　レー、ちゃんが……?」

「　　ああ。レインは自分を殺そうとしたシエルに反撃して……彼を殺したんだ」

あっぱりと言い放つラグナに麻奈はさくらりと同じように顔を俯かせる
直志は何か言おうと口を開いたが、結局何も言えず、ビールを一気
に煽つた

雪枝はきっと自分が水を差すべきではないと判断しているのか、ず
つと直志の横で三人を見守つている

「　　さうか……だからレーちゃんは、自分の事を……」

「　　……ああ」

「　　……なら、私には説得などできない、か。何故ラグナ自身で説得
しないんだ?」

「私やそなたが説いても、レインの心には届かぬからな」

「　　……何で?」

「　　家族だからだ」

静かに自分が説得しない理由を話すラグナ

「家族は大切だ。それは間違いないじゃない。生きていく上ではとても大きな支えだらう。だが、結局私達は他人なんだ。本当の家族以上に家族であつても本当の家族以上に他人と見てしまうんだ。それは生きる意味にまではならない。だから……さくら、そなたの力が必要なんだ」

ラグナは今まで向いていた方向からさくらに視線を移した
ずっと俯いたままだつたが、その視線に気付いて顔を上げる

「わ、私は……どうしたらしいか分からぬの……何て言へば……」

「支えるというのは難しいものだ。背中を押すといつわけじゃない。手を引くわけでもない」

「難しいよ……分かんないよ……」

「レインは、きつと暗い世界の中にいるんだ。どこを見ても真っ暗な、自分の姿さえ確認することのできない、深く悲しい世界に。
だから、まず灯りを持つていってあげるんだ。懐中電灯みたいに遠くから照らすのではない。そなたとレイン、そなたら一人の足元がわかるくらいの小さくて暖かな灯りを」

きつと今までで一番綺麗な例え

ラグナはさくらにそれを教えていく

さくらは無言で言葉を聞いていく

「そして歩けばいい。一人でしか作ることの出来ない、夢の未来へ」

「二人しか作ることの出来ない……夢の未来……」

未来

未来

ラグナの言葉を何度も言い返してゆく
何かを掴んだのだろうか
誰にも分からぬ

分かるのは、さくらのみ……

「 ラグナ

ぽつりとラグナの名前を呼ぶ

「レン君は、どうしているの？」

「…………。何を言つたか考えたのか？」

「…………レン君と付き合つてた頃の私つてね、いつも行き当たりばつたりだったのよ。前以^もつて計画してた事はみんな失敗。だか

ら

今回も行き当たりばつたりよ

くすくすと笑いながら言つた一言に思わずラグナは苦笑する

「そなたは三年も経つのに変わらないな

そうしてレンの居場所を事細やかに説明していく
さくらも元は特選クラスのメンバーだ。それくらいなら、一度聞い
て覚えた

じゃ、行つてくるわ

さくらは自分でも道順を復唱してから全員に断りを入れ、外に飛び
出していく

残された近堂家とアスハの面々

「おー、ラグナ」

しばらくしてから直志が声をかける

「せーべりたこに任せて、いいのか?」

「ああ……三年もの間、互いに互いを好きで居続けたんだ。きっとうまくこぐれ」

「はあー、何かロマンチックね」

雪枝は呑気な事を言っていたが、誰もツッコまなかつた

ただ惰性のように生きていた

起きて、仕事に出掛け

食べて、寝て

身体が覚えている事を繰り返すだけ

そんな日々に生きていた

身体を痛め付けるように紹介してもらつた仕事を働き続けた

何もかも忘れてくて、全てを省みずに仕事を続けた

何もかも忘れていたかつた

だから 忘れてしまつた

だけど 忘れられなかつた

もう何もかもが嫌だつた

શાસ્ત્ર

レインの耳に聞き慣れた土を踏む音が入ってきた

「...レン君、みつけ」

声で分かる。さくらた

何故と思考するかすぐにはテクナが教えたんだ」と答えた。

「こんな所にいたんだ。あ、隣いい?」

いい、よくない、と返事する前に隣に座り込むをくり

「」

.....

互いに無言

静寂が辺りを包み込む

そんな時間が何秒、何分経つただろう
静寂を破りさくらが話し出す

「どうして私から、奈波から逃げたの？」

二〇〇〇年

「逃げないでレン君。大丈夫、私は無理に聴かないから。押したりしないし、引つ張つたりもしないよ。隣で聴くだけだから、ただ言葉を漏らすだけでいいよ」

微笑みながら、顔を腕と黒衣で覆っているレインに優しく凭れ掛かった

それ以上何も言わない
押したり引つ張つたりしない
そつと寄り添つてあげている

「…………分かつたから…………」

無限にも等しい時間の後にレインは身体を動かさずに、口だけを動かした

「あくらの家で婆さんに言われて、分かつたんだ……思い知らされたんだ……」

「…………何を?」

「俺は……罪を犯した俺に関わった奴を、不幸にすることを……俺が何かを壊してしまった元凶なんだって…………」

ぽつり、ぽつり

締め切らなかつた蛇口から漏れる水滴のよじにレインは少しずつ、はつねに言われた言葉を喋つていく
さくらは相づちは打つていたが、最後まで口は挟まなかつた
最後まで聞き終えると「そつか……」と天を仰ぐ

「レン君はお婆ちゃんの言葉を真に受けたの?」

「全部、本当だからな…………」

さくらが大好きな人の顔だつた
二年前と変わらない無表情の顔
ようやくレインは顔を上げる

「俺…………」ついしてシエルに反撃したんだわ！」

「生きたかつたからでしょ」

「シスター や皆がいないこの世界に……生きる理由なんてないよ……」

「え……？」

「俺も……シエルに殺されて……シスター達と死にたかった」

思ひ出すふねへり

叫び、無理にレインの頭を胸に抱き締めていた

「あ……」

「お願い、お願いだから……お願いだから、そんな悲しい」と言わないでよ。私、レン君が好きだから。レン君がいなくなつたら、私がレン君みたいになつちやうから……」

聴いてるだけじゃなかつたのか、何て聞けなかつた
誰かに抱き締められるなんて久し振りだつた
言葉は紡げなかつたが、代わりに腕を伸ばした。伸ばして
くらの背に回す

「俺も……俺も、さくらが好きだ。大好きだ。三年前、別れてから
もずっと好きだつた……だけど……」

回した手がぎゅっと力を籠める

「怖いんだ。俺は知つてるから。どんなに大切な奴も、いなくなつ
てしまふ事を……一番幸せな時も、いつかは消えてしまふから
俺、怖くてたまらないんだ……」

どんなに腕つぶしが強かろうと
どんなに頭が良かろうと

ずっと隣に居てくれない。居続けさせることなどできない

「私はここにいるよ。私はここにいて、今、レン君を見る。これ
からもずっと、一番傍で見てる」

「でも……こつかきつと、会えなくなる」

「うん。ずっと一緒にいられないね。いつかは会えなくなる時が、
絶対に来ちゃう。それがいつになるかなんて……私には分かんない。
もしかしたら、二年前みたいにあんな突然かもしれない」

「でもね……」

ますます強く抱き締めてくるレンを強く、優しく抱き締め返しながら、レンの髪を、指先でそっと撫でる

耳に付いていたピタスが、言葉を待つよつて揺れる

「もしも私が、レン君よつ先にいなくなつちつたりしても

私はよつと、レン君の傍にいる

レン君の一一番傍で、よつとレン君を見てるから

私はよつと、レン君を守るから

レン君が立ち止まらなつよつて

「私は……レン君の罪を許します」

「つーつー」

また腕にぎゅっと力を籠める

「レン君が明口も幸せになるために、つと優しくしてあげます」

「さくら……」

レインは胸から顔を上げる

瞳には溜まることのなかつた涙が溢れんばかりに溜まつていた

「俺、弱虫だから……さくらがいなくなつたら、絶対泣くと思つ。泣き続けて傍にいてくれても、気付かないかもしれない。さくらの事、嫌いになるかもしない。それでも……こんな俺と、一緒にいてくれるか?」

「うん」

「一緒にいて、幸せに出来なくてもか?」

「うん」

「俺と結婚してくれるか？」

卷之二

……ししのか？」

驚かは睡を見張りたかひにやんせわくは詰れ過

「君として」とか「私に幸せたから」

堰が切れたのだろう

ハリド五抄

今まで泣けなかつた分を取り戻すよ」と
子供みたいに、わんわん泣いた

おぐるに何も言わす
我が子をあやすよ」にたたずみと
頭を撫で

ていたのだつた

数分後

泣き止んだレインはやくらと共に歩いていた
互いに互いの指を離さないように絡めて
二人は近堂家に向かって歩いていた

「…………」「めん」

不意に立ち止まり、そう謝るレイン
やくらは、ん？ と首を傾げる

「三年前、黙つて逃げて……」

「もう、いいよ。レン君は私の幸せを考えて、そういう行動を取つ
たんだし」

「…………うん」

「…………でも寂しかった」

「だらうな」

「だからね…………」

上田遣いでレインを見つめる
一瞬もレインは逸らしたりしない

「今は 寄り添うだけじゃ物足りないの」

さくらは眼を閉じて、爪先で立つ
レインも眼を閉じ、屈み、そして

唇を重ねた

なめらかで、湿っていて、柔らかくて、温かかった

これが、人の温かさ……

レインは唇をそっと離してみる

「レン……」

息を継いださくらが、レインの名前を呼ぼうとする
その前にもう一度、唇を今度はいつしかり塞いだ

「んっ……」

強く……強くさくらを抱き締める
自分の拠り所である彼女を

さくらの全部をずっと憶えておくために
さくらの声、さくらの髪、さくらの頬、さくらの

感触

別れても……一緒にするために

今まさしくさくらを憶えておきたかった

やっと彼の刻は動き出す

彼女と進むその一步が幸せに続いていると信じじて

(後書き)

とこりわけで、レインとさくらの恋物語でした
如何でしたでしょうか？ 私個人としては、会心の出来だと思つん
ですが……

付き合い、別れ……そして再会

皆様から見たらどう思われるでしょうか

ぜひ感想、意見、批判を書いてくださると嬉しいです

最後に、この作品ですが 時間があり、また創作意欲があれば
第一弾を書きたいな～なんて思つちゃつたりもしています
共に歩いていくと決めた二人のそれからが書いている本人でも気に
なつているんですよ（オイ）

それでは、今宵はこれにて御機嫌よう

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7488u/>

さくらアナザー～罪隠す弱者と寄り添う桜花～

2011年10月6日17時08分発行